

結婚は縁だ。いくら愛していても縁がなく、結婚に至らない恋愛は星の数ほどもあろう。この連載を読んで下さる皆様の中にも、縁があってご結婚なさっている方も多いと思う。そして結婚は新しい何かを創造する力にもなる。新しい家庭、新しい家、新しい絆。国際結婚の場合は国と国を結びつける大きな力にもなり得る。そして、その結びつきによって、化学反応のように新しい何か生まれる。だから、結婚という表現は別の創造物に比喩的に使われる。ワインを熟成させていく過程で、「2つの風味のマリアージュ（結婚）」などと表現したり、料理の批評でも使われる。音楽界でよく使われるのは、「(常任)指揮者とオーケストラの蜜月」という言い回しだ。

今回は、NHK交響楽団とスイス人指揮者シャルル・デュトワの「結婚」が創造し、世界に発信された「日本」についてお話をしたい。

8月25日、ザルツブルグ音楽祭で日本の常設オーケストラとしては初めてNHK交響楽団がデビューを飾った。この音楽祭は昨年、元チューリヒ歌劇場総裁だったアレクサンダー・ペレイラ氏が芸術監督に就任し、世界の宗教音楽をテーマにしている。昨年のユダヤ教に続き、今年は仏教・神道の音楽がテーマとなり、それに基づき、日本がサブテーマとなったためである。

NHK交響楽団とデュトワ氏の「結婚」は約20年前に遡る。既にフィラデルフィア、モントリオールなど他のオーケストラを掛け持ちしていたデュトワ氏に何度断られてもアタックし続け、1996年ようやく口説き落として、常任指揮者として招き入れることができたのである。それからのN響は、海外ツアーにも定期的に掛け出るようになったり、「ドイツ的」と称されることが多かったサウンドが変わってきたり、新しいレパートリーに挑戦し続けるなど、充実した「蜜月」を過ごした。

デュトワ氏はローザンヌに生まれ、スイス・ロマン管の創設者アンセルメ等に師事しながらキャリアを積んでいったが、大の日本好きだと言われている。前妻であるピアニストのマルタ・アルゲリッチと共に日本の地を踏んで以来、40年以上もの間途切れる事なく来日している。

デュトワ氏はローザンヌに生まれ、スイス・ロマン管の創設者アンセルメ等に師事しながらキャリアを積んでいったが、大の日本好きだと言われている。前妻であるピアニストのマルタ・アルゲリッチと共に日本の地を踏んで以来、40年以上もの間途切れる事なく来日している。

N響は8月17日に日本を出発してドイツ入りし、ヨーロッパ3国を回るツアーが始まった。そして8月25日、ザルツブルグのフェルゼンライトシュールでのコンサートにはベルリンフィルの音楽監督、サイモン・ラトルの姿もあり、関心の高さが表れていた。プログラムは武満徹作曲『ノヴェンバー・ステップス』(武満徹夫人とお嬢さんもコンサートにいらしていたとデュトワ氏が嬉しそうに話してくれた)、ザルツブルグ音楽祭委嘱の細川俊夫作曲『嘆き』、そしてデュトワ&N響の十八番、ベルリオーズ作曲『幻想交響曲』である。

まず『ノヴェンバー・ステップス』は尺八と琵琶がソロを弾く、視覚的にも非常に日本的な曲だ。デュトワ氏の、N響を、そして日本人を加護するような指揮姿に頼もしさを覚えた。しかし、身体を揺らして吹く尺八や一心不乱にかき弾く琵琶に、なんと後ろの聴衆がグスクス笑い出した！「やはり日本と西洋の壁は厚い」と心の中で深いため息をついたのだが、そのザワつきをものともせず、2人のソリストは禅僧のような集中力で演奏を続け、最後は大きな拍手が会場中を包み込んだ。「日本人の底力はこれなのだ」と再認識させられた。

続く『嘆き』は、細川氏が以前インタビューで語って下さった言葉を借りると、「2012年3月11日のドイツの新聞に掲載された、東日本大地震による津波で失った子供の遺体を祈りながら探す母親の写真に心を打たれ、この悲しみを浄化するような音楽を作りたい」という衝動から生まれたという。海を表すオーケストラの音をバックに、ザルツブルグ出身の詩人トラークルの詩と、彼が自殺する直前の手紙から完成させた歌詞を、ソプラノのアンナ・プロハスカが語り始め、それが自然に旋律を伴っていく。暗く、深く、そこに存在する海、そして荒れ狂う波。嵐が去った後も、海は壮大で人間が勝ち得るはずもない。「自然と共存する」という言葉をよく聞くと、それすらも間違えている、自然の中に邪魔しないように生きさせて頂くという姿勢が、人間の出来る最良の生き方なのではないか。そう確信した時、曲が終わり、拍手がどんどん大きくなっていった。音楽を通して悲しみを浄化すると共に、世界中の人々に人間として慎ましく生きていく力を与えられたらいい……。

そうして後半は一転してフランス的ロマンチズムで、N響の実力を誇示した。私達日本人にとって異文化であるフランス音楽をここまで自分のものにできてこそ、前半の独自の文化の説得力が高まるというものだ。アンコールにはビゼーの『アルルの女』組曲第2番「ファランドール」で、悲劇を乗り越えていけ

音楽の処方箋

文/中東生



第9回 スイスと日本のマリアージュ

そうして後半は一転してフランス的ロマンチズムで、N響の実力を誇示した。私達日本人にとって異文化であるフランス音楽をここまで自分のものにできてこそ、前半の独自の文化の説得力が高まるというものだ。アンコールにはビゼーの『アルルの女』組曲第2番「ファランドール」で、悲劇を乗り越えていけ

そんな日本の力強さを感じさせ、何度もカーテンコールが続き、大成功のうちに終演となった。こんな「結婚」なら意義深いものだ。デュトワ氏は現在N響名誉音楽監督となり「蜜月」は終わったが、毎年最低1回は定期公演3プログラムを振りてN響に戻り、2012年度「最も心に残ったN響コンサート」の1、3、4位を占めたというから、彼らの「愛情」は形を変えて、より強固になったと言えるかもしれない。

これから結婚したい方、結婚という形に縛られずに幸せになりたい方、日本人として元気になりたい方、是非、以下の処方箋をお試し下さい。

これから結婚したい方、結婚という形に縛られずに幸せになりたい方、日本人として元気になりたい方、是非、以下の処方箋をお試し下さい。

これから結婚したい方、結婚という形に縛られずに幸せになりたい方、日本人として元気になりたい方、是非、以下の処方箋をお試し下さい。

NHK交響楽団 12月定期公演 シャルル・デュトワ指揮

- Aプログラム** 11月30日、12月1日 於NHKホール
 ストラヴィンスキー作曲バレエ音楽「カルタ遊び」、リスト作曲ピアノ協奏曲第一番変ホ長調(ピアニスト、スティーヴン・ハフ)、ショスタコーヴィチ作曲交響曲第15番イ長調作品141
- Cプログラム** 12月6日、7日 於NHKホール
 プーランク作曲グロリア(ソプラノ、エリン・ウォール)、ベルリオーズ作曲テ・デウム(テノール、ジョゼフ・カイザー)
- Bプログラム** 12月11、12日 於サントリーホール
 ラヴェル作曲組曲「クーランの墓」、デュティユー作曲チェロ協奏曲「運かなる遠い世界」(チェリスト、ゴートイエ・カブソン)、ベートーヴェン作曲交響曲第7番イ長調作品92

*日本では、11月30・12月6日・11日にNHK-FMライブ放送でもお聴きいただけます。